



黒い炎の戦士①②

白石一郎
徳間書店 (新書)
(11/30、12/31刊・
各¥680)

本誌連載中のシリーズ、第一、二巻。

田沼意次の時代、六人のオランダ人が出島から日本に上陸した。彼らは西洋帆船を建造する船大工だったが、実は白光の戦士と呼ばれる超能力者たちだった。鎖国をし、文明の停滞した日本に、再び進歩を甦らせる伝道師なのだ。だが、白い戦士の存在を逸早く感じ取った者がいた。それが黒い炎の戦士である。白い戦士の象徴する文明進歩は、別の見方をすれば外部からの干渉にすぎない。彼らは、人知れず戦いを開始する。

田沼時代という設定は『妖星伝』でも使われている。『闇と光』の戦いとなると、毎月一冊ぐらいは必ず出てくる——それでは、一体何が新しいのか。まず敵になるはずの『闇』の側から描かれている点(だから、進歩派の平賀源内は白い戦士側に入っている)。それに、黒い炎の主張というのは、ポール・アランダースンがよく書いた『自力更生』の考え方だ。この文明批評的な視点がなければ、忍者ものを少し進めた超能力者もの、というだけで、ちょっと面白味に欠けたろう。筆の冴えは、さすがベテラン作家、傑作大作として十分に楽しめる。